

復興のシンボル 奇跡の一本松を次世代へ

～林木遺伝子銀行110番による海岸林再生の取組～

森林総合研究所 林木育種センター 東北育種場

笠井史宏 千葉信隆 春原武志

東 日本大震災の津波により、東北地方の太平洋岸の海岸林は、壊滅的な被害を受けたことから、東北育種場では、いま何をすべきかの検討を進めた結果、育種技術を活用した震災復興支援を行うこととしました。

ここでは、津波により消滅の危機に瀕した奇跡の一本松について、林木遺伝子銀行110番を活用して、後継樹を育成することで、貴重な林木遺伝資源の保存と海岸林再生を目指した取組について、紹介します。



●なぜ、後継樹が必要なのか

奇跡の一本松は、名勝「高田松原」の中でも、樹高28m、胸高直径87cm、樹齢200年以上と、周囲の松林から頭一つ飛び出た巨木であり、育種素材として貴重な林木遺伝資源です。また、被災前の高田松原は、樹齢70年を越す松林が広がっており、かつての姿を取り戻すためには、長い年月をかけ、造り育てていくこととなり、海岸林再生活動を支えるシンボルとなる後継樹が必要とされました。

このような中、4月22日、日本造園建設業協会や日本緑化センターを中心に、奇跡の一本松を守るための活動が本格的に始まり、現場では、樹勢診断に使った枝でつぎ木を行い、後継樹育成に取り組むこととなりました。

当初、4月下旬では、つぎ木の適期を過ぎているので、無理せずに冬まで待つべきとの意見もありました。これは、つぎ木に使う穂木は、切断によるダメージを少なくするため、木が休眠している冬期間に行われ、また、つぎ木も、台木が休眠から覚め、活動を始める春先、遅くとも4月上旬までに行われるからです。

また、奇跡の一本松は、樹齢200年以上の老木で、海岸の

風の強い場所に成育しているため、花芽が多く、枝の成長が良くないため、更につぎ木は難しいと考えられたためです。

このため、一本でも成功するためには、どうすれば良いかと考え、①穂木を真水で洗い、葉に付着した塩分を取り除く ②穂木が弱らないように、採取と同じ日につぎ木を行う ③採取した枝からできるだけ多くの穂木を採るなどの工夫を行いました。

●ツギキ四兄弟の誕生

つぎ木開始から約50日後の6月13日、つぎ木の活着状況を調査したところ、4本の芽が伸び始めていることを確認しました。この4本のつぎ木苗は、漫画家のやなせたかし氏に「ツギキ四兄弟（ノビル、タエル、イノチ、ツナグ）」と命名して頂き、平成25年春頃の里帰りを目指した育苗が始まりました。

四兄弟は、老木の枝のため、芽の伸びが遅いことから、施肥や水やりの管理をこまめにやった結果、9月頃から冬芽が充実しはじめ、10月上旬には、苗高約15cmと順調に成育しています。

今回の増殖に当たっては、増殖ミスや目的外の流通を防止するため、林木育種センターで、DNA解析を行い、遺伝子レベルでのデータの収集・管理による信頼性の確保を図っています。

以上のように、つぎ木が困難と言われる時期での取組でしたが、これまで培ってきた育苗技術の活用やツリークライマーや奇跡の一本松を守る皆さんの力で、貴重な遺伝資源の保存と復興のシンボルである「奇跡の一本松」の後継樹育成に協力することができました。今後は、松くい虫・塩害に強い高田松原の再生を目指し、抵抗性マツの開発・普及を進めていきます。

最後に、ツギキ四兄弟が冬眠から覚めた頃、新たな奇跡をお知らせできるかもしれませんので、ご期待下さい。

